自由に削れる面白さ

鬼瓦職人 富岡昭さん（小川町）

瓦一筋

―お年は今おいくつなんですか。

富岡　七十一歳かな。

―ご出身はこの辺りですか。

富岡　いえ、鳩山なんです。たまたま、ここの小川町に、叔父がね、瓦の製造をやってた関係でね。この道に入った。ですから、瓦以外の仕事はやったことない。ははは。

―鬼瓦を専門にやろうと思ったのは。

富岡　そうですね。当時はまあ、この界わいの瓦屋さんは鬼瓦は群馬県の藤岡っていう所で仕入れてきたわけですよね。ちょこっと手先は器用だったもんで、「鬼瓦の方に転向したらどうか」と勧められまして。

―鬼瓦について少し説明していただけますか。

富岡　瓦の屋根だと、必ず、「棟」というものができるわけですよね。瓦をふきあわせた頂上のところにね。そこへ棟瓦を積んで、雨が浸入しないように施工をするわけですけど、その「棟」の両端に、飾るところができるわけですよね。ええ。そこに使う瓦のことを、鬼瓦とか、鬼板とかね。いうわけですよ。

―瓦屋根の家には必ず使われるわけですか。

富岡　そうです、そうです。普通の瓦を使う場合は必ず鬼瓦を使うわけですよね。二、三十年前までは、普通の民家がやっぱり圧倒的に多かったですよ、ええ。ところが、幾年か、メーカーが中心になって家を造るようになって、昔からの和風建築がだんだんなくなっちゃって、もう住宅も、鬼瓦は一部になっちゃって、やっぱり神社、お寺さんとかが主流になってきましたよね。ええ。

―鬼瓦は鬼の面の形をしているからそう呼ぶわけですね。

富岡　一般的に、鬼瓦っていうと、鬼の顔の付いた瓦を想像するわけですけれども、両端を飾るものっていうのは、たとえば、川越の蔵造りなんかを見ても、そこに鬼が付いているわけじゃないんだよね。大半は、水や波の模様だとか、空の雲の模様だとか、まあいずれにしても圧倒的に多いのは、火災除けを意味するものが多いということで。あとはまあ、縁起物っていうんですかね。

いぶしで銀色に

―窯を使って焼くのは焼き物と一緒ですね。

富岡　そうそうそう。同じですよね。

―形をつくるのは全部、手で作るんですか。

富岡　そうです、そうです。

―道具は何か使うんですか。

富岡　型紙を使うんです。ええ。和紙に、作うとする鬼瓦の図面をいて。その和紙の図面を一枚あれば、どんどんできるわけですよね。

―できたものを、そのまま焼くんですか。

富岡　そう。乾燥してく。陶器と違って、瓦場合は、うわ薬は使わい。窯の構造がね、干、陶器の窯とは違うけです。いぶしをしても、息が完全に密閉し漏れない、そういう仕みの窯なんです。

―いぶしっていうのは煙で色が変わる…

富岡　ですから、窯にがあいてて酸素が入れ燃えちゃうわけですね。それじゃ具合がい。いぶし瓦にならなわけ。

―すべて自然の煙の色んですね。

富岡　そうです。炭素すよ。ええ。炭素が粘の表面に、こう浸透て、ああいう、銀色にるわけです。

―鬼瓦の良さを言葉で現していただくと。

富岡　皆さん習ってるは難しいっていうんけれども、難しいだけね、非常にやりがいがあるというか、魅力的な仕事ですよ。これはね。ていうのは、やっぱり絵からね、図面から自分で描いて、手で、完全手作りでね、できるっていうことは。ええ。それとまあ、木彫と違って粘土っていうのは、あとで付けたり削ったりが自由にできるわけでしょう。そういう点で、木彫よりさらに複雑なね、仕事ができるっていう、これはもう最大の、粘土のね、鬼瓦の面白さですよね。

立川式の系統

―富岡さんは「立川（たてかわ）式」の系統ですか。

富岡　江戸時代の宮大工の中で、主流だったのが、「たてかわ」っていう、大工集団ですかね。鬼瓦の立川流の初代って言われてるのは、江戸末期の人ですけれどもね、京都の御所に仕事で行ってるときに、立川の宮大工の彫刻より出来がよかったっていうんで「立川」を名乗ってよろしいという、襲名の許可がでたんでしょう。それで、その人が初代だってことになってね、それで、うちのせがれ（富岡唯史さん）なんかが、今、四代目ですよ。

―息子さんは襲名されているんですか。

富岡　そうですね。三代目は、「おにひで」さんって言ってね。うちのが四代目ってことですよね。

時代の変化と縁起物

―県の伝統工芸品の指定を受けているそうですが、鬼瓦では埼玉県でお一人だけですよね。

富岡　今はね。ええ～。

―今は息子さんと、お二人でやってらっしゃる。

富岡　あとはまあ、五年くらい前からね、県の技術者育成事業っていうのがはじまって、六人ばかり、生徒がね。まあ、毎日ではないんですけれどもね。ええ。まあ、一人前の職人を養成するっていう制度があって、それで組合としてね、受けてやってるわけです。

―それでは、後継者の心配はありませんね。

富岡　後継者はね、別に問題ないんですけれども、むしろ需要の方がね。ええ。もっと増えてこないと、新しく一人前になった職人さんだって大変ですよねえ。

―最近、屋根じゃなくて置物に使ってる人がいるんですか。

富岡　そうですね。これからもっと、いろんな方面にね、使われるようになるでしょうね。ひとつにはね、時代がこういろいろ変化してきて、なんていうかね、時代が移り変わるっていうか、幕末みたいなときもそうだったんですけど、世の中混乱してきますね。そうするとやっぱり、縁起物っていうかね、いっぽうでね、そういう気持ちが増えてきたんじゃないですかね。最近。そんな感じがしますよね。

WOMAN

占いは集中力が大切

タロット占い師 葵和歌さん（池袋）

二十二枚のカード

―タロット占いについて、簡単に説明していただけますか。

葵　カードは、大アルカナ（二十二枚）の絵札と小アルカナ（五十六枚）の数札ですが、たいていのことは二十二枚の大アルカナで十分占えます。最初、その占うテーマをいただき、テーマ別に占う。ですから、タロット占いっていうのは、お悩みを、今の健康状態はどうかとか、これから仕事はどうなるかというような形で、わりと狭いポイントに絞っていただいたほうが、答えが明確にでるかと思います。

―二十二枚のカードから占う人が何枚かを引くんですか。

葵　最初、カードを伏せたままテーブルの上に広げて、両手で時計周りに、円を描くようにして混ぜていただくんですね。それをまた、私が混ぜて、お客様が混ぜて、ひとつにまとめて、お好きな数だけ分けていただく、またそれをひとつにまとめていただいて。その展開法はいろいろあるんですけれども、私は主にヘキサグラムというスプレッドを使っています。

―そのスプレッドは何枚ですか。

葵　開ける枚数は七枚。

―その七枚の組み合わせで。

葵　過去・現在・未来。それと、自分の気持ちとか願望とか。または、周囲の状態とか。恋愛でしたら相手の気持ちとか。それと対応策と、最終予想。

近未来の予測は的確に

―決まり、ルールがあるんですか。

葵　ルールはあります。ええ。

―でもやっぱり、当たる人と当たらない人がいるかと思うんですけど。

葵　勉強をしていれば当たると思いますし、集中力が大切です。

―それは、混ぜたりする過程で、その人の潜在意識が出てくるということですか。

葵　そうです。タロットの場合はこう、私とお客様が集中してひとつのテーマを占うので。

―すべて出てくる。

葵　ええ。そうです。ですから、お客様が触れることが、第一条件。

―やはり今までやって、自信というか、おありですか。

葵　的確に出ます。タロットの場合は、そうですね、二年、三年先よりも、今現在どうしたらよいかという、近い未来の方が出ます。

―ということは、時期で少し変わってくるということですか。たとえば三ヶ月後に、また占ったら。

葵　はい。その方の状態が変われば。

―使われるのはタロットだけですか。

葵　性格とか、運勢のいい時、悪い時は、西洋占星術で生年月日から見ますけども、これからどうなるかっていうことに対しては、お客様に毎回タロットは引いてもらいます。

仕事の相談が増加

―お客さんは、どういう人が多いですか。

葵　今の職場にいてどうなっていくかという方とか、やはり、恋愛で、彼とどうなるかとか、どう相手が思ってるか。

―これはもうずっと前からそうですか。

葵　最近はやはり、お仕事のご相談が多いですね。結構男性の方も見えます。

―男性の比率はどのくらい。

葵　十人に、やっぱり三人くらいですね。

―タロット占いっていうと、恋愛の占いみたいに言われていませんか

葵　わりと、若い方に人気があるんでねえ。

―占いというのは今の時代、需要が増えてきているんでしょうか。

葵　増えていると思います。

―それはどういうことから。

葵　経済的にも、景気がよくありませんし、またご家族とコミュニケーションも取れてなくて、ご近所とかお友達に相談するよりは私たちのような仕事の人と話をするほうがお客様がストレス解消できるように思えます。

―恋愛の質問で最近の変化はありますか。

葵　変化というんではないんですけど、やはり今、携帯が普及しているので、メールですか。彼から、メール出してもこないとか。メールの出し方が悪いんでしょうとかいうのが最近の話ですね。

―メールって重要なんですね。今の若者にとっては。

葵　そうですね。それが今の特徴かもしれませんね。ですから、メールを出す日を選んでくださいという方も結構います。

―リピーターが多いですか。

葵　一ヶ月に一回、一週間に一回とか、もっと頻繁にみえる方もいらっしゃいます。

―何も変わらないんじゃないかと思いますけど。

葵　お仕事が営業関係の方は、お客様が入ってくださるか入ってくださらないかとか。

デパートの占いコーナー

―葵さんは、タロットをいつ頃からやってらっしゃる。

葵　えっと、三十年くらい前からです。

―お母さんも占い師だったそうですね。

葵　ええ。今でも占いコーナーに出ています。

―普通の仕事はつかないで、最初から占い師ですか。

葵　そうです。

―タロットを選ばれたのはどうしてなんですか。

葵　タロットの絵柄に惹かれたのがひとつですね。

―最近の仕事は、池袋（東武ホープセンター）を含めて。

葵　デパートの占いコーナーです。

―あと個別に、自分のところで受け付ける。そういうのはないんですか。

葵　それはホームページから、メール鑑定を受けてます。結構、お客様、遠い方が多いもので、メールで答えていただけないかという依頼がありましたので、去年から、ホームページを母と二人で開設しました。

―占い師っていうお仕事について、どう思われてますか。

葵　「当たるも八卦、当たらぬも八卦」って言われることもありますが、お客様も真剣に来られるので、私たちも真剣に取り組まないといけないと思います。